

「研究のあゆみ」に寄せて

近年における社会環境の変化は、子どもたちの遊びを取り巻く環境も変化させてきています。自然に恵まれた遊び場の消失や日常の遊びが極めて限られたスペースでしか行われないというような状況の中で、子どもたちが思い切り身体を動かして遊ぶといった身体活動の機会も減る傾向にあることは周知の事実でもあります。このような状況は、幼児期における子どもたちが、身体を動かすことによって発達させることのできる運動能力といった身体的な発達はもちろんのこと、人間としての多くの能力の発達を未熟なままにしてしまうことにつながることも考えられます。

幼児期にある子どもたちの望ましい発育や発達には、フレーベルが主張しているように、幼児の自主性を重んじた「遊び」を中心とした身体活動が行われることが理想であると考えられます。しかし、前述したような子どもたちの遊びを取り巻く環境を考えたとき、幼児達の自主性に任せておくばかりでは、十分な発育・発達を期待することは難しくなっているのが現実であると言えることができると思います。このような、幼児達の状況を考えると、何らかの教育的な働きかけ、すなわち運動遊びなどの運動指導を工夫して行う必要が生じてきていると言えるのではないのでしょうか。

幼児期の運動指導については、まず、遊ぶことの楽しさを身に付けさせること、運動することが好きになるような教育的な働きかけを行うことが大切であると思います。また、幼児をやさしく励ましなが、幼児とともに一緒に身体を動かして遊ぶという保育者の姿勢も重要であると言えます。さらに、健康・体力づくりを目的とする運動遊びの内容は、幼児の運動量に差を生じさせないために、運動技術の伴う運動遊びや個人の興味や関心などに活動量が左右される自由遊び的なものより、むしろ集団的で運動の技術的要素があまり影響しない運動遊びを考えると良いとされています。

以上のようなことを踏まえて、平成22年度、柏市立教育研究所と柏市私立幼稚園協会が共同で、幼児の体力・運動能力の向上を目指した研究を行ないました。本研究では、柏市内の全公私立幼稚園が参加し、研究の一環として行われた運動能力調査には5,000人以上の園児が参加し、大規模なものとなりました。その結果をもとに、柏市独自の運動能力基準表を作成し、幼児たちの運動能力の現状を知ることができました。また、各園では運動能力測定の結果を踏まえて、園児一人一人の体力・運動能力の向上を目指したさまざまな取り組みが行い、その成果はこの報告書の中にまとめられています。さらに、本編の中でも述べられていますが、活発な日常を送っている幼児達は運動能力が高く、食事を沢山食べ好き嫌いがない傾向にあるという幼児の日常生活と運動能力との関連についての興味深い結果も明らかとなりました。今回の研究成果を踏まえ、今後も各園での実践が継続して行われていくことを願っております。その際には、運動能力測定の数値を問題にするのではなく、幼児たちが日常生活の中でいかに活動的な生活を送ることができるかということ念頭に置いた取り組みを考えていくことが極めて重要であると思います。活動的な生活を送ることが、結果的には幼児たちの運動能力を向上させ、よりよい発達につながると考えられます。

今回、短期間でこのような成果をまとめることができたのは、研究の計画段階から実施に至るまで中心的役割を担った共同研究推進委員会の皆様、また、現場での測定や調査の実施に携わった各園の共同研究協力員、ならびに担任の先生方のご協力の賜であったと思います。ここに、甚大なる敬意を申し上げます。

今後も、研究が継続され、さらに柏市全体の幼稚園教育の充実と推進が図られることをお祈り申し上げます。私自身も、微力ながらお手伝いをさせていただけたらと思っております。

聖徳大学大学院
准教授 太田 繁